

真新しい校舎には「TAKATA HARUYUKI SCHOOL」の文字が刻まれていた。21年前、カンボジアに平和をもたらすための活動中に凶弾に倒れた文民警察官・高田晴行さん(当時33歳)の遺志をくんで作られた学校。「先生になって晴行さんのことを教えたい」「国を発展させられる大人になりたい」。熱帯の陽光に子供たちの笑顔が輝いた。(カンボジア・ニエカリエチ 菊政哲也、写真も)

## カンボジア新校舎

タイ国境に近いカンボジア北西部のニエカリエチ村。30日午前9時半、約300人の生徒や住民が迎える中、高田さんの母の幸子さん(81)と姉の国府和子さん(59)が四輪駆動車から降りた。2人は目に涙を浮かべながら、最期の地に作られた慰霊碑に白と黄の菊を献花する。その目前にレンガとモルタル造りの校舎が立っていた。

高田さんが駐在していた

# ハルさんの心と学ぶ

## 遺族「子供たちの力に」



新校舎で生徒に記念品の文房具を手渡す高田幸子さん(右)と国府和子さん(30日、カンボジア・ニエカリエチで)

北西部はボル・ポト派が勢力を維持、最も危険な地域の一つだった。高田さんは現地警察の指導や選挙制度の支援、住民の苦情処理など様々な任務を担いつつ、活動の合間に日本から取り寄せた用具で子供たちに野球を教え、住民から「ハル」と慕われていた。

と慕われていた。

幸子さんらは3年前に初めて現地を訪れた際、乾燥させた水草で木の骨組みを覆っただけの粗末な校舎に心を痛め、「晴行が愛した子供たちの力になりたい」と校舎の寄贈を決意。カンボジアに学校を建てている

NPO法人の協力で昨年5月に基金を設立し、高田さんの元同級生らからの寄付などで850万円以上を集めた。

建設工事は、雨期に資材を搬入する車両が入れなくなった。領土問題でタイ国境の緊張が高まり建設会社の社員が避難してしまったりと、トラブルの連続だった。



高田晴行さん

贈呈式を終えた和子さんは「この学校が日本とカンボジアの懸け橋になれば」と話した。幸子さんは「多くの方から寄付をいただいたことに感謝します。学校は日本人の善意の結晶。日本人として誇りに思います」と真新しい校舎を見上げた。

### 選挙監視員の警護中に殉職

高田警部補(当時、殉職後に警視に特進)ら文民警察官75人は1992年10月、国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC\*)に派遣された。カンボジアでは総選挙を控え、政治的基盤を失うことを恐れたボル・ポト派の妨害工作がエスカレート。高田さんらが襲撃される約1か月前にも、選挙管理部門の国

連ポランティアとして活動していた中田厚仁さん(当時25歳)が襲われ、射殺されている。

高田さんは1993年5月4日、同僚の文民警察官4人とともに、ノルウェーの選挙監視員を警護してタイ国境近くに移動中にロケット砲などで襲撃され、死亡した。

\*UNTAC=United Nations Transitional Authority in Cambodia

【ニエカリエチ(カンボジア) 菊政哲也】1993年5月、カンボジアでの国連平和維持活動(PKO)中に武装勢力に襲われて犠牲になった岡山県警の高田晴行さん(当時33歳)の名前を冠した学校が襲撃現場の村に完成した。

高田さんは政府の派遣したPKO要員初の日本人犠牲者。学校は、カンボジアの復興と平和に命をささげた高田さんの遺志を受け継ぐよう、遺族らによって設立された基金で建てられた。



## 遺志継ぐ校舎 カンボジア



寄贈した新校舎の前で、生徒たちに囲まれる高田幸子さん(手前)と国府和子さん(30日午後、カンボジア・ニエカリエチで)＝菊政哲也撮影

JHPによる高田晴行スクールの記事が5月1日付読売新聞1面および社会面に大きく掲載されました。